

友史会 2025 年 10 月講座例会

秋季特別展「きらびやかに送る — 国宝・藤ノ木古墳出土品修理事業成果展 1 —」

令和 7 年 10 月 19 日（日）橿原考古学研究所 講堂

平井洸史 学芸課主任研究員

「装飾刀子からみた藤ノ木古墳の時代」

土屋隆史 宮内庁書陵部主任研究官

「金銅製装身具からみた藤ノ木古墳と葬送儀礼」

[感想文 10 月例会だより]

令和七年度 秋季特別展の「きらびやかに送る— 国宝・藤ノ木古墳出土品修理事業成果展 1 —」の研究講座第一回を講座例会として、展示物とその背景を 2 人の講師に講演いただいた。なお展示会は十一月末で終了している。

◆平井洸史（橿考研付属博物館学芸課主任技師）

「装飾刀子からみた藤ノ木古墳の時代」

他の展示物だけでなく装飾刀子にも注目いただきたいと、その特徴の紹介があった。

金属刀子は大きく三つの系統に分かれ、四つの段階で変遷したと考えられる。藤ノ木古墳には三つの系統がそろっていて第Ⅱ段階に相当するという。

第Ⅰ段階は五世紀後葉から六世紀中葉に当たり、六月の歩く例会で訪問した高井田山古墳や小山 2 号墳など、いずれも朝鮮半島系の要素が色濃く見られる古墳での出土である。

第Ⅱ段階は六世紀後葉で、藤ノ木古墳を初めとして、綿貫観音山古墳、寛弘寺 2 号墳、三里古墳などあり、事例数も増加し和装太刀工人の貢献が多いとのこと。六月の遺跡旅行で訪問した綿貫観音山古墳は、時期が近いだけでなく副葬の方法も類似しており有力者の埋葬方法として共通点が見られる。

第Ⅲ段階は六世紀末から七世紀初頭で、第Ⅱ段階の系統が断絶し主流となる形式が変化した。工房の統合などが背景にあるらしい。前山古墳、丸山塚古墳の事例がある。

藤ノ木古墳から出土した刀子では、圭頭系の銀装刀子は百濟系または百濟製、円頭系の銀装刀子是新羅や百濟の特長もあるが国産との評価、倭装系の金銀装刀子は間違い無く国産と評価される。形や材料の少しの違いで系統や由来が分析されるのは推理小説の種明かしのような驚きがある。様々な要素を持った太刀が一緒に出土していて、被葬者の謎に思いを馳せる。

予稿集と会場に掲示された、装飾刀子の系統と変遷の図が分かりやすいとの司会の学芸課青柳課長のコメントがあった。

装飾刀子はこれまで数ある展示物の一つだったが、埋葬氏族の性格を表現するものでもあり、これからは注意して鑑賞してみたいと思う。

◆土屋隆史（宮内庁書陵部主任研究官）

「金銅製装身具からみた藤ノ木古墳と葬送儀礼」

飾履（くつ）、冠、髪飾りとそこから窺える葬送の形について講演された。なお、土屋先生は学生時代に、研究所に入られたばかりの青柳課長と発掘現場で一緒になったことがあるという。

飾履はサイズが四十番前後あり日常使いではなくモガリの場で仰向けの状態で履かせたものと考えられる。人目につかない部分の歩揺の装飾が省略されている点も、それを裏付けている。

底板と側板の接続方法から見て百済の影響はあるものの倭で独自の長所が顕著である。接続方法までは見えないと思うがサイズや模様の省略については展示で確認したい。

冠はその形状から広帯二山式冠と呼ばれ中央に蝶型の止め金具があるのがなかなかチャームである。分類としては四分類の内、線刻B類と呼ばれるものである。加耶から日本に来た類例では、飾りの部分が元々花と蔓だったものが、船と波に読み替えられたものなどあり面白い。飾履同様、これもまた葬送儀礼用と考えられている

髪飾りが今回一番興味深かった。金銅製半筒形品は二本一組で用いられ、男性の下げ美豆良（みずら）に縦方向で用いられたと想定される。群馬県で出土した埴輪にその様子がうかがえる。これは、北側の被葬者のものと考えられる。

一方、金銅製筒形品は単独で出土していて、美豆良に用いられたとは考えにくく繊維や人毛の方向から横向きに利用された可能性が高いという。後世の笄（こうがい）のような使い方、どちらかというとな女性が利用していたと思われる。この装身具は南側被葬者に付随すると想定されること。つまり関心の高い被葬者の性別について北側は男性、南側は女性を装身具は示唆している。もちろん、これだけで結論が出たわけではないが、装身具からの分析結果はなかなか面白い。

装身具はモガリの場面で装着され、埋葬の段階で外されて足元に置かれたものと思われる。

以上二つの講演を通じて、朝鮮半島からの影響と倭での進化、葬送儀礼の様子、他の国内の事例との関係など藤ノ木古墳の背景にある国内外の活発な交流状況と工人たちの努力の跡を知ることができた。講演の聴講と展示の鑑賞の機会を与えていただき感謝いたします。

東京都 建部周二